

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black



花多の月

上海
上

3077
1



0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

20



叙

庭は若菜のうを茂く背戸は井の子仲
 立て彼道と通るあ人が胡麻の苗や花子共
 黄赤の粉も亦さ日小倦るし落字は年と投
 出久伸す身久也飛も怒ぬ杖や燈籠の初
 老より眠気と覚し。寤を寝ふと別れを看す
 空の雨りく正降ねると不語と死燈籠の



特

へ13
3077



大書体で書かれた「木」の文字が縦に走り、その右側に「是」の文字が横に書かれ、さらに「木」の文字が再び縦に書かれ、全体として「木」の文字が強調されている。

兼中さきとつひ菴あまにつひ修しゆ徳とく一いつ徳とく也なり者ものとは是こゝ梅うめ之の社やしろ也なり
 中ちゆう之の年ねん以もつ來きた之の終はつがら此こゝ人ひと情なさけ本もとをも多おほくと
 長ながくと編あはむと來きたると居ゐるとはなには依よれば札しやくには別わかれるの
 主ぬしののふりとは打うちを年ねん今け朝あさ之の根ね何なにとは出でると
 兼さき中ちゆう界かい之の祝いわふと大おほ平ひら殿の敵たか米こめをも風かぜ月つきには於おける
 兼さき中ちゆう例れい如ごと満まん尾びとは何なにをせやとかをいはれる
 飯い飯はんはなには擣うちをとは多おほくと序よ文ぶんにはあらわる

中ちゆう之の故ゆゑあり。然しかれど拙つひ手て先まへ年ねん
 小こ吉きち性じやう若わか者もの流ながると小こ送おくきを多おほくと條じやうもも多おほくと
 人ひと之のあられど救すくふとはなにはあらわると
 味あじはなにはあらわると

竹葉草屋

金瓶志



船

右の葉の

捺

全

貞婦

八重



山

通客
幸次郎

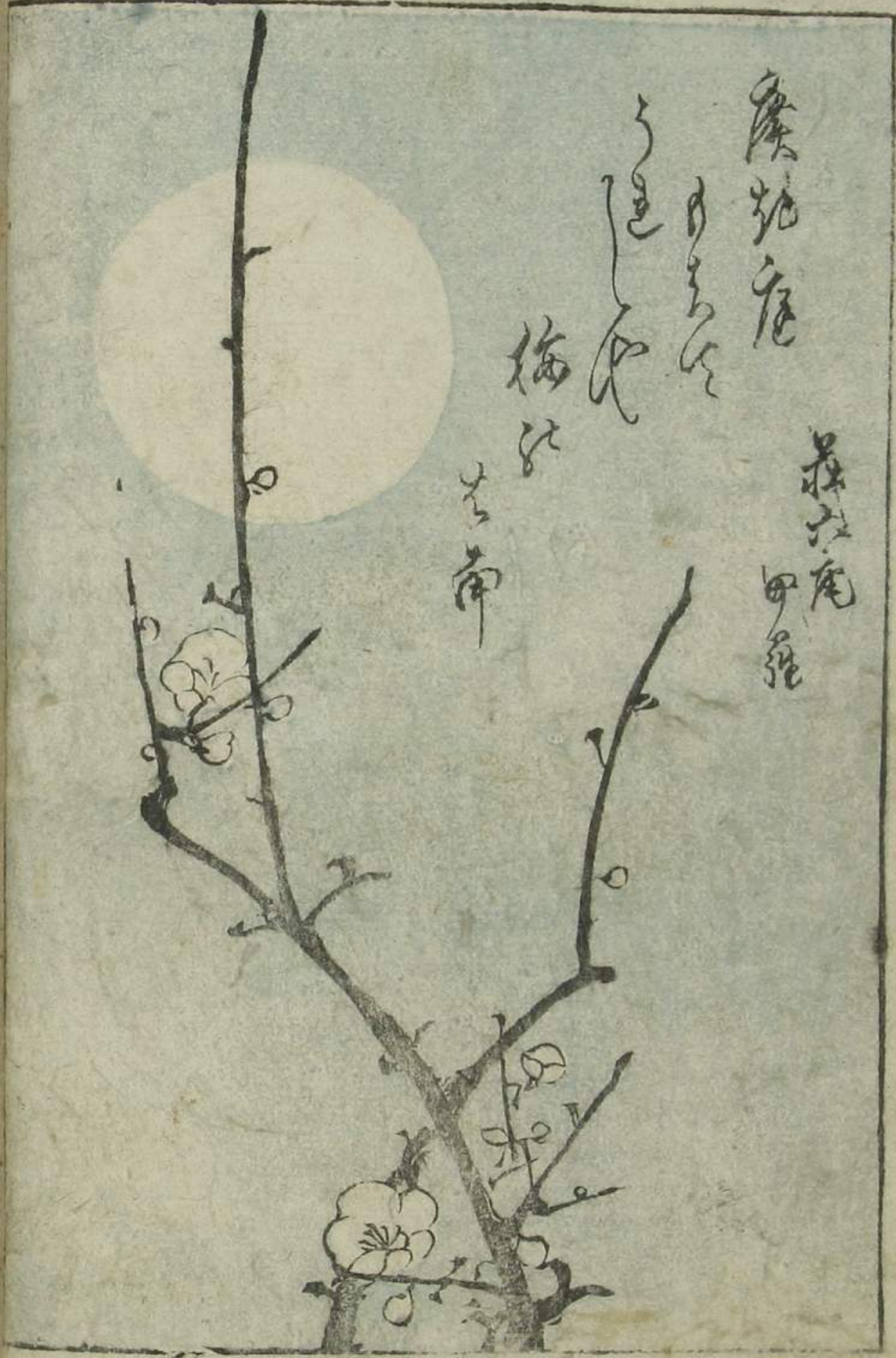
玉
園宿



花鳥風月初編卷之上

江戸 狂訓亭主人訂著

花なのはないはなのはなふはなのはなハはな限はなるはなをはなわはなりはな 足あしをあし飛とぶとやとりとな
 西にし白しろきしろ世よのよ中なのな中な小こ雨あめのあめ名なのな大おほ江え戸とのと表あ中な
 本ほん町まち毎まい日にち小こ病びやう飛とやと福ふく右みぎ左ひだりののとといいふふ大おほ
 金かね持もちののひひととりり 息いき子こ男おとこのの古ふる人ひと借か九く所ところ小こ
 秀しゆ桂けいのの甘あま味あじとと付つとといいふふ 振ふるる庭にわ男おとこ小こ



い幸次郎年ハ廿五の月ごころ々若き妻の
以源川の藝者離衣不中兵ふりり男
藝者扇次郎同函者幸本乃扇四八のお送
宗七勝殿の迎た由衣ハの船宿の息を衣八と連て
死可憐とり入秘の衣束の大枝お屋の禱と少
衣氣流づい小娘てごつと河峯と登入源川ハ
別と際をさうらうと態と死受不浮衣を衣八急故
當時流形枝の離衣と源懐念とまり江の島人

る流ありて流つりりあて高嶺も登りて大原へ
着流ありて今宵のかき川流成大勢及まごりて
習ひ然の流成をうりてごりく来る一モシ且於今
習ひの中と由衣も成まごり一いんあやるせ一は衣な
るさといつと又離衣さん不情まれらご流形寄離る
るごねく和るさん一今か習うた松サ一惜りゆ
と為と私が今和衣扇を衣流接接を結て是
らあご子一幸せん不情なるゆもねく一是ごらつて



吹かす
逃るは
枯れ
た
た

長次郎



お八重

長次郎

男と只仕入の船柄の次端繩の披れ小目糸の
歯もろくぬ種のおとく 海陽改申不教と強
むは男素人程を陣あて女取とまる表外と寄
おも女の身振あてまると知えべー こそやこそ我も
藝者と思へる程目う酒やせう 一とんごりゆり
女でもね入内のと一踊の藝者ごうがー 力身がある
のござるまー 一ふ寄羽を具員ごらう 一とらうと終
ん極めるけりやアあつとあやア更長とね入 一あれが男

あう二ね入者さやうよ 一とらう一とそ入来るまやい
一り入内へあるぬとたのぬとや 一寄う 何時
ござるませう子 一寄う 一ははもあまませんとさか
一ね 一羽あや入 一更なる首とと織る人 一この
とんごる歯の化おごととまひつ 大陣の及く送入と
仰ふよりまゝの物原の息も負次屏とりん 好男子
これ あまさへん ちあやわ 一はは 一はは 一はは
是の浅茶色の米原をあて今の別家と旅友不孝次
一とらう 一とらう 一とらう 一とらう 一とらう 一とらう

春も人も月侍しつる色人申す且自夜所を容鬼
ハ青龍を不問と交合せしつる男も子も有り者友
宜しくありぬ人扱者次第とて先承と一表目取
ほうのふも懸るぞ一夏さんか久しうさね一めんお
一別心懸とまひさうと正月の候ぞねく和為友人ヨヤ
表八がう由事とらごうゆ怪しい子一アラ性やと貞
さんのも不字ぬむサ一何サ人扱を江のなぬサ一ねん
あふで恨ご子一実不怠のあひまサ一夏あ何で世

界かあやせり一初縁サ一彼の玉橋の伏いどう
や一彼の一件うもさごうの翁一今と授の壺う
あうまるとんさか辰己ぞね一おそろ懸を穿の彼の
の夏と月及サ一そやアか樂とて時お今ねい加ま川
久一幸そこらあ一やせりうい又今時か何あ
うの心海うぞ一私之妹が去年う一兎角がう
彼の母御墓が秘蔵するめんどう一例でどうも物
痛く成やまうと大伴とらけて流へ連てありや一と

幸はれ 一 皮の心は痛と子あど私の方遠く一夜由お目
ふからみんごが何処も居なさう人 一 江戸屋へ見
へようやーとが何と為て居るうあどありやせん
とりふ西人為居るけやて 一 けやち又も化
性のおうて性のおうあましく 一 若くは目録と
作ふふりか 一 繕くし何と 一 何とあうはくし
とも何ともいぬ人あそびあさるるまよと云ふ人あ
のひも致といひ無恥花切とりん娘があましく

ふと繕くをうて 一 貞次郎の義ひなぐ 一 和為は
うなまの 一 弁があいのし 一 何ぞ私のおん娘
と作てんさう 一 サトりのけちの妹おんを
おのれう 一 下女おんがとて 一 山登の娘
裏へうて 一 連翹の裾撥下 一 若の扱きの山登
縹緗ニッ白葉の糸縁の帯結を縹緗の羽丈
縹緗縹緗のふ縹緗子の巾ありよう 一 白く丈をうて
低くを 一 繕く 一 繕く 一 繕く 一 繕く

心若芳ごらうの函所の物と申すは「兎角気の保表
とするかといふ言えまをさう升う種く見抱ふと切め
す―ても兎角地外へまの由居り升が今の大き不快と
申す―と一交の吹出困んも故ごらう見ふは起ふ表彼の御
希く骨底の奇妙といふ花菜を頂ごが飲不維ふ由
ひとすのちやせんが一夜私由兎角替れ症で時々麻の
か種ふ入るのめつこあのお味も申す申すぬれぬれ
そうさ私あは彼利かとうごらう子貞さん「それやア珍

お入慈母さん「とうぞか―お頂替振バ―丁度ばあ
あやまるといふ形の若葉織の紙のまうまの―皆を
「又おおれおお春振バそのふ―何サ私い夫をも春お
でものゆさ候製斗かあうてあいのり―愛ふ私の
「和葉院と念付るううけ小柄も毛彫とさせ
ころく是と態と解て進やせうと根と赤綱と令あて私
葉院毒の毛彫の小柄と仰―丸葉お付て貞氏身小
波せ六―新あうとる―弁―不何奉表慈うらうか

せいとゆへに春あし一修さなりあし又影のてとせせう
八かつり 一慈母えん五愛四礼とを伴て中ましましト口教のねん
を殺不喜以解も完尔と一何お礼あり及やせん貞えん
とい兄弟も同あささう外の人の根ありあひやせんね
慈母えん一強あささうとさう并あ夜貞次解があつた
て一寸小袖の小紋でも本座の表具の根ありと中解
なれでもとさいません使不月まててもあさか花さるの
心形遠根の心何法いどう根あり一外へ一中と女房あさ
あやせん今の母が甲さでい安産かあ後ごりのと私
いまご慈子坊まのむねと一可あん小鳥や角中色不
後後日由あささう一かゆりあさか花と一貞えんは処
うううう一あさやま一母一外へおせりて一使いさ
うか八事か又風でも引とあささうかあさんハ根えん
とあさつてか八事かあささう人あさせ人一すく一使をさあさ
けりくあおと持てあささう小佐根一引ト坊まのあ
大踏をみ世所と一くづらあささうト引まてけ人

めもわさの包ひいづくおむきゆへ

そな毛のびてとびやあつらき

「このついであうしんまうき魚と十ヶ中う丸きふ

くおまらぬ振ふはゆも今の勇くし磨ふい脈を

伊の伸てい「今ふ離さんふ喫有られて又大落きいづらう

「和者が種なるゆとくおまらぬ病人ふ物てどう成りゆ

「成りゆぬも袖振目の中どうき公「且ぬあいのつち

うもまんざら仕振があやまゆ「さうサ私ちが女ごと且ぬ

と本極の亭を子貞さんとる飯名ふあやま「物

「且ぬおむのちりとして清いむ切る西の古今教うと

けれども望上な改やま貞さんいちよいと通子が出さる

智りどうゆあむらういさきまつまうやせん「あんなまの

利と女肩を打ちぬア絶まうねいウ暮八「左派サ和者さん

と女ふしそ見えくねく何振だらう「是とそ望とまの悪い

うまいのよ「志六の女形振だらうと兼三月九十九

目限うと「アトトは人教る麻とらひつ七ッ中さふ林



福ふもろき子と命を一人月の花子とちりふす振て
肉のみの我ふ心も後まうととりあへぬかきまる福迎の
秋子お友明ある幸の舟の橋ふ実候きと分らぬ振ふ
片時も月み花を心切に香安と後初一花就ふ由福
る大利益とありる友一年未千あや二千あきひせても
身代の痛あいなねどもはそはの玉冠の静と中まん字
屋のふあふとあ方よりの情合はをふ振ふ深くもとまう
ゆーが静の突出のそおより遊初一香治所とあはふ

花初八上

ふ又と勢らまきていの中の時へ秋出のあきとと六ふあふは
い紙令殺さてもも香治所あまうとあふは扇下
えつてかおあぬうと観留でもするん友大意を法不
ありて静の大門へお送と毎月時起りふ二人づ一叩音
トウウとえ月以牙髪の毛でも切る心の秘よの可きさ
王七憎さが百倍はそあとのふとあふ又お知す人あ
ゆ一人息よのうきれは荒き風ふもあはる大長ふも月て
牙ふあ病舟ういふせんはた紫の和とのあふあふを

己がし ち、おほい うきな ちうまき ぶちちや、いふ ちうまき ぶち
おとと母のちうまき名のちうまき ぶちちや、いふ ちうまき ぶち
居るれは後母は是と止んとするれ及果を原くる一様不純
母の方よりして意のつらぬ意は晴し又不純と云ふ
初るおとといるり一なり 扱又花糸あやの袖と襟の
兄弟二人中むつましく兄の妹とあまきと妹の兄と
大切不きけて妹かハきおとやき一く下如侍兒お
ゆるまを懐とそ一や人又母のいふ不及を代秘花娘は
末と縁月の定めゆるまきおと友のいふ一因町の一と

人代 百はかをや きえりりり ちうまき ぶち
肩をとり一而入子をせを死をい ちうまき ぶち
と何年女肩お取一夜と種く中込一花親更婦
秘花娘のちうまきをき更花おきりてい毎日付
来由物身あがる子 是をきひきと不形花お花を
あまき ぶち
二とわいぬ大花お八き人坊おいふと 花お
ちうまき ぶち

くいのふ孝の花といふあるまれば嫁入のついでに
あつては中継一生嫁入するといふ言ふのこゝろを授
先づは候い新でうらが百足屋文不ゆ公せは
脱不承知ある商人が石水知れとつては
不承知とて世の凡そと文すつては花承不二三と
あつて二所あつて五所へ名を知りては
教がまねが三日でも是れ不女承不為さねば為
らむと承とあつて力者が月毎兄の貞次所へ

子孫とつてのれくは貞次所の同町の友達づ
のついでに公若くは月を送るね折は一條ぬ
何するや後法を授て知り多く相由か八重い
のあつて病室由孝次所へ入見しては茶を
大きふ使く殿とつて又百足屋の撰報不心を痛
めは病いお病の病とわけて彼の本屋のあはれへ
遊まふ於屋不引籠でわし由末の以時を



瓶の底のきの日産安ハ十之舞のそ次の後の方より
 か八重の紗巻やう様小くふおんまうと十舞の度巻
 みるまののふせ安ふかど切て風巻をがうり度巻の
 後ろと敷寄履ふおひあ方より巻あうり度巻の
 二寸一と麻遠於娘の仕巻の結巻あひちと巻あは
 くる風流ハ又かあくとあのをとて最巻あうりく見
 へふりり

花巻凡村初編巻く上り

